

Title	English Modal Adverbs: Their Functions in Synchrony and Diachrony(Abstract_要旨)
Author(s)	Suzuki, Daisuke
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	2015-03-23
URL	http://dx.doi.org/10.14989/doctor.k18710
Right	学位規則第9条第2項により要約公開
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

京都大学	博士（文学）	氏名	鈴木 大介
論文題目	English Modal Adverbs: Their Functions in Synchrony and Diachrony （英語法副詞 ー共時、通時的観点から見た機能ー）		
（論文内容の要旨）			
<p>法副詞は、その意味的性質や生起位置の自由さから、認識性や主観性を超えて、談話分析、会話分析、コーパス言語学、認知・機能言語学、さらには文法化や（間）主観化というように、関係領域が多岐にわたる。ゆえに、英語における言語使用を考察する上で重要な言語現象であると言える。しかし法副詞の研究においては、法副詞全体が主観的な意味を表すのか、あるいは客観的な意味を表すのか、という点について統一した見解が未だに出されていない。また語彙レベルに至っては、各研究者によって表現の扱いが様々であるという現状にある。これに対する解決方策として、コーパス（実際に話し言葉や書き言葉として用いられた大規模な言語資料が電子化されたもの）を導入した客観的・科学的なアプローチが利用できる。本論文は、コーパスから得られた法副詞の使用例を数量化し、表あるいは図として視覚的に提示することで、法副詞の特性を具体的・科学的に明らかにすることを目的としている。</p> <p>同時に、本研究では、複眼的視座からの分析により、法副詞を機能の観点から捉え直すことを試みる。具体的には、(i)モダル機能、(ii)談話機能、(iii)対人的機能といった言語の一般的な働きに着目して、より広いコンテキストから節を超えたレベルでの要因を調査して分析を展開する。まず、法副詞の法性に関わる(i)に着目し、共起する法助動詞の蓋然性（可能性）から法副詞の蓋然性の度合いを特定する。また、法副詞は法助動詞と共起することによってモダリティの意味が強まるため、話し手の心的態度を明示するようなモダル機能に深く関わっている。この点に注目して、法副詞がどの程度、法助動詞と共起するのかを調査する。次に、(ii)から、法副詞の生起位置や法副詞が生起する節の主語の定性に着目することで、談話との接点を探り、節を超えた談話レベルでの機能の相違を具体的に示す。最後に挙げた機能である(iii)については、話し手と聞き手のやりとりの中で、聞き手に同意を促す、あるいは情報の確認を行うといった際に法副詞がどのような役割を果たすのかを調べる。この機能は、話し手のみに重点が置かれた従来の分析にとどまらず、聞き手をも含めた、より高次のレベルに関係するものである。</p> <p>具体的な分析手順としては、コーパスを用い、そこから該当表現を具体例として全て抽出している。コーパスに収集された用例というのは、独立した単文（節）の集合ではなく、実際のテキストの一部であるため、まとまりのある体系の中で該当表現を考察することができる。すなわち、文という単位を超えたより広い文脈に基づく要因を扱うことが可能となるのである。本論文では、コーパスのこのような特性を利用することで、従来から軽視されがちであった文脈に依存した機能や文脈の中から生じる機能に着目し、表現との関係性を詳細に論じる。より広いコンテキストから法副詞を捉えることで、より具体的な法副詞の機能を見ることができるのである。また、共時的に分析してきた現象を通時的な分析へと拡張し、様々な種類の法副詞を分析対象に加えている点も本論文の特徴である。そうすることで、普遍的な要因の調査や分析が</p>			

可能になるのである。

従来の「法副詞」という範疇には雑多な表現が含まれており、同程度の蓋然性（可能性）を表すとされる表現が数多く存在する。本研究では、具体的な言語現象として、*certainly, definitely, indeed, of course, undoubtedly*と*doubtless, no doubt, probably*そして*maybe, perhaps, possibly*という3つの同義語のグループに属する法副詞を主な分析対象とし、各グループにおける表現間の相違について、それぞれの生起環境に基づいた詳細な分析を進めていく。

本論文は7章から成っている。以下、各章の要旨について示す。第1章では、本論文の研究背景や研究目的、研究内容（分析対象）を述べるとともに、本論文の構成を紹介する。その中で、英語におけるモダリティや英語法副詞に関わる基本概念を概観し、本研究で採用する言語観や分析の枠組みについての説明を行う。

第2章では、法副詞に関わる様々な先行研究の検討を行う。具体的には、「客観と主観の区別」、「疑問文中における法副詞」、「法副詞の共起」、「法副詞の生起位置」という4つのテーマに分け、順番に法副詞の扱いや振る舞いを見ていく。その中で、従来の意味論レベルでの分析には限界があり、コーパスに基づいた、談話・語用論レベルでの詳細な分析の必要性を主張する。

第3章では、多様な形式を有する英語の法副詞を網羅的に分析し、その形式と機能との関係性について考察を行う。法副詞を接尾辞-lyの形式を有するものと有しないものとに分類し、LOB, FLOBのコーパスデータを分析することで議論を進める。*certainly, probably, possibly*等の-lyの形式を有する法副詞は節のMedialに生起する割合が高く、1960年代と1990年代を調べてみても30年間で変化を示さなかった。一方、*indeed, doubtless, maybe*等の-lyを有しない法副詞に関しては、MedialよりもInitialやFinalでの使用割合が高く、さらにこの30年間でその割合を増加させていた。すなわち、語順と機能の関係から、文頭において談話機能を担う傾向が強く、30年間でその働きを増していることが明らかとなったのである。このような振る舞いは、副詞の典型的な標識である-lyを有しないことで可能になっていると考えられる。以上のように、意味の似通った法副詞間の機能的な差異を具体化する中で、形式と機能が密接に関わっている点を明確にする。

第4章では、機能論的な観点からの実証的な手法により、複数の語用論変数を引き出すことで、英語法副詞の談話機能の違いを論じる。具体的には*doubtless, no doubt, undoubtedly, without doubt*という4つの類義表現を扱い、コーパス分析及び実験的調査の結果に基づいて議論を進める。コーパスを用いた調査に加え、同じく実証的な手法であるアンケート調査を導入することで、より詳細な要因の分析が可能となる。まず、談話構造の観点から、(a)生起位置と(b)主語の定性という各要因が与える影響を調査し、さらに、この二要因の交互作用も検証した。結果として、(a)の影響力の大きさや、(a)と(b)の組み合わせによる効果が得られ、4つの法副詞(句)の中ではとりわけ*no doubt*が談話的な二要因と密接に関わっていることがわかった。最後に、方法論的な示唆として、実験的手法の利点に言及すると同時に、コーパス調査との組合せによる長所も提示する。

第5章では、第4章で扱った談話的な変数に加え、更に複数の語用論的な情報を数量

化することで、法副詞の機能の相違を実証する。具体的には、*maybe*と*perhaps*という、意味や蓋然性の点で類似し、また似通った生起環境で用いられている二者を扱い、それらの差異を明確にする。まず、モダリティを強める機能（モーダル機能）に着目し、節における法助動詞との共起情報を数量化した。次に、法副詞の談話レベルでの振る舞い（談話機能）に焦点を絞り、法副詞の生起位置を調査した。最後に、話し手と聞き手のやりとり（対人的機能）に注目し、法副詞が生起する節の主語の定性を調べ、各代名詞との共起パターンを考察した。結果として、意味論レベルでは同様でも、節を超えた談話・語用論レベルにおいては表現間の機能に有意な差異が見られた。この点を踏まえ、言語変化メカニズムとの関係から、その相違について考察を加える。

第6章では、*doubtless, indeed, maybe, no doubt, of course, perhaps*といった、現代英語において特徴的な振る舞いを示す表現（すなわち、*-ly*の形式を有しない法副詞）がどのように発達したのか、その通時的変化に分析を拡大する。法副詞は英語史研究において、主観性や認識性の発達との関連のみに着眼した分析がなされてきた。しかし、現代英語においては、上記の法副詞が文中の様々な位置に生起して多様な機能性を備えている。そこで、本研究では、コーパスとしてPPCEME, PPCMBE, CMSWを用いることで近代英語期における発達を、併せてCLMET3.0を使用することで、後期近代英語期の下位区分にあたる期間での推移を分析した。さらにはLOBとFLOBを利用することで現代英語との連続性についても調査を行った。特にInitial, Medial, Finalという生起位置の変遷を記述していく中で、生起位置と機能との関係を考察した。結果として、後期近代英語期において、*-ly*の形式を有しない副詞が法性を帯びたことに加え、その時期での振る舞いが現代英語における発達の端緒となったことが明らかとなった。このような周辺の法副詞が初期近代英語期以降、軌を一にする変化を遂げているのは注目すべき点である。こういった事実から、「法副詞」という範疇、さらには、現在における法副詞の様々な語用論的機能の発達を考える上で、後期近代英語期が極めて重要な時期であるとの主張を行う。

第7章では、本論文のまとめとして、全体の要約を示した上で、本論文で得られた成果と結論を述べる。特に、*-ly*の形式を有しない法副詞について、現代英語における各表現の特徴や、現代に至る発達の経緯についての要約を行う。併せて、法副詞については従来扱われなかった言語の動的な側面に着目し、一般的な言語変化メカニズムとの関係性を議論する。最後に、言語研究における本研究の記述的・理論的・方法論的貢献やその重要性について述べる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、話し手の心的態度を表す英語の法副詞 (modal adverbs)、たとえば *certainly*, *probably*, *possibly* などの振る舞いを、談話機能と関連付けながら実証的に分析し、議論したものである。英語の法副詞は、その種類が多様であるばかりでなく、文中の位置についても比較的自由であり、また意味も文脈によって変動するため、これまで英文法では扱いにくい領域の一つであるとされてきた。先行研究では、「話し手の確信を表すもの」、「若干の疑いを表すもの」など、さまざまな分類が試みられてきたが、一致した見解には至っていない。

本論文は、このように複雑な振る舞いをする法副詞を、できるだけ客観性の高い方法で整理する提案を行っている。具体的には、法副詞が文頭に起こるか、動詞句の位置に起こるか、文末に起こるか、に着目し、これを指標に、法副詞の談話機能を測定する。一般に談話では、文頭位置にはトピックとして文全体を導入する役割が付与されていると考えられている。したがって、この位置に生じやすい法副詞は、本来の語彙的意味に加えて、談話的な機能を担っているということができる。本論文は、この点を手掛かりに、議論を進めている。たとえば、*maybe* と *perhaps* は、辞書的には類似の意味をもっているが、*maybe* の方が文頭に起こる傾向が強く、したがって談話的役割が大きいと推論する。実際に *maybe* と *perhaps* が使用されている文を分析してみたところ、*maybe* は、一人称や二人称の主語と共起することが多いことが明らかになった。話し手や聴き手が話題になっている場合には、*perhaps* よりも *maybe* が好まれる事実も、*maybe* の談話性が高いことを示していると、本論文は結論づける。

このように本論文の顕著な特徴の一つは、文中での位置という比較的わかりやすい指標を一貫して利用していることである。指標を単純化したことで、コーパスを用いた量的な分析が可能になり、その結果、いくつかの興味深い事実も明らかになっている。たとえば、法副詞には、*certainly*, *definitely*, *possibly* のように *-ly* を語尾に有するものとそうでないもの、たとえば、*indeed*, *doubtless*, *no doubt*, *perhaps* などがあるが、両者を談話機能の観点から見ると、明確な違いがあることがわかった。文頭位置では、*-ly* 語尾のない法副詞が起こる傾向が強いことを、本論文は明らかにする。さらに興味深い点は、この傾向が20世紀の後半以降、さらに強まっていることである。*-ly* が付与される副詞が典型的な副詞であるとするならば、*-ly* を伴わない副詞は周辺的な副詞であり、この周辺的な法副詞が談話機能を獲得する変化が、現在も進行中であるという。

また本論文は、法副詞の振る舞いを、20世紀の変化に限らず、より大きな英語史の視点でもとらえている。法副詞の史的变化を扱った第6章では、談話的機能が比較的強いと考えられる *-ly* を伴わない副詞に焦点を当てながら、近現代英語期を通じて、その文中での位置がどのように変化するかを議論する。この章におけるさまざまな指摘の中でも特に注目すべきは、これらの法副詞が文頭位置に起こる傾向は、一貫して強まってきたわけではないという点である。初期近代英語期から後期近代

英語期にかけては、動詞句の位置、すなわち文頭ではなく文の半ばで起こる傾向が一旦強まっていることが明らかにされている。-lyを伴わない副詞は周辺的であり、したがってまず法副詞としての資格を獲得する段階を経るのだと、本論文は主張する。動詞句の位置は、いわば副詞が生起する典型的な位置であり、この位置に起こることで*doubtless, no doubt*等は副詞としての地位を確実なものとし、そののちに、文頭位置への移動が本格的に始まる。生起位置に関するこの二つの動きは、一見したところ矛盾していると感じられるかもしれない。しかし本論文は、法副詞としての地位の獲得と談話化という二つの通時的変化を整理することで、解決策を示すことに成功している。

このように本論文は、法副詞という、分類がきわめて難解な領域に談話機能という視点を導入し、通時・共時の両面から一貫した結論を導き出している。コーパスを利用した大規模な調査による検証とともに、コーパスの弱点を補うために母語話者を対象としたアンケート調査を組み合わせるなど、手堅い手法が確認できる点も、評価できる。ただし、望まれる点がないわけではない。談話機能を手掛かりに法副詞を分類する手法をとりながら、前後の文への気配りが、やや不十分であるといえる。また談話機能そのものが多様であることへの配慮も、議論の過程で深められるべきであっただろう。しかし、これらの点は、むしろ今後の研究の発展を期待させるものと解釈することが可能であり、論文の価値を損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2015年2月17日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。